

住生活における心地よい光環境に関する研究

○石田享子* 山崎古都子**

(*奈良女子大学・院, **滋賀大学)

【目的】住宅の照明による快適さ・雰囲気を追及する研究の多くは、明るさに焦点おき、暗さに焦点をおくものは少ない。本研究では、両者に配慮した快適さを求めるため、現在の照明実態を把握し、居住者の照明の意識、関心を明らかにする。

【方法】マンション居住者と学生の合計186名を対象に、照明実態を把握する世帯用と個人の照明意識、関心を問う個人用の2種類のアンケート調査を実施した。調査時期は、1999年10～11月。方法は、原則として留置自記法とし、一部マンション居住者については郵送法を併用。

【結果】居間での滞在時間は長く、多様な行為がされていた。その行為には、照度を下げの方が好ましい行為も多く含まれていた。だが、調光を問う項目から、明るくするのは積極的に行うが、暗くするには消極的な傾向にある。原因には、①明るい＝プラス、暗い＝マイナスというイメージを形成する言葉の概念、②1,2箇所天井光源で適正な作業面照度を得ようとする、③作業面の照度不足を全般照明の増加で補うため、全体の明るさを強める傾向にある、④近視に対する教育などが挙げられる。天井付け照明が多い原因は、①安全・安心感から部屋全体を明るくする、②狭小空間の処理方法、③家具配置に側壁を利用などの志向が働いていることが挙げられる。一方、団欒には、賑やかさと安らぎの2側面があるが、意識の中で賑やかさ、積極的コミュニケーションを団欒と考えているため、多様な行為がされても、その行為に合った全般や局部照明が適切に利用されていないことが明らかになった。